

大講堂

「南都七大寺」として知られる奈良の寺群にとって、長い間論議が中心的な教義でした。南都とは奈良を意味する歴史的な同義語です。薬師寺はこれらの寺院の1つであり、何世紀にもわたって僧侶が大講堂内に集まり、仏教について研究し、論議してきました。長さ41メートル、深さ20メートル、高さ17メートルの大講堂は、薬師寺の本堂（金堂）や奈良で最も大きな寺院の建物の1つです。堂内に安置されている弥勒三尊像は法相宗の教えを説いた仏であり、この広大な建物の機能は礼拝のためではなく、仏教全般、特に法相宗の知識を育むためのものでした。

実際、現在の建物は比較的新しく、2003年に建設されたものが、その規模は、薬師寺が勉学を重視し続けていることを反映しています。

何世紀も前、大講堂には阿弥陀浄土変相図と呼ばれる9m×6.5mのタペストリーがかけられていました。これは持統天皇（645–703）が、薬師寺を考案した夫の天武天皇の魂の安息のために作ったものです。この複雑に織り込まれた曼荼羅は、仏教の経典によると、阿弥陀（無限の光の仏）が浄土に信者を連れて行く過渡期を描写しています。浄土曼荼羅は、講堂全体とともに、1528年に火事で破壊されました。